

# 北京のセールスマン

SALESMAN  
IN  
BEIJING

アーサー・ミラー

倉橋健訳



# 北京の セールスマン

アーサー・ミラー

倉橋健訳

早川書房

# SALESMAN IN BEIJING

by Arthur Miller

Copyright © 1983, 1984

by Arthur Miller

Photographs copyright © 1983, 1984

by Inge Morath

First published 1987 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

International Creative Management, Inc.

through Tuttle-Mori Agency, Inc.,

Tokyo.

## 北京のセールスマン

昭和62年11月20日 初版印刷

昭和62年11月30日 初版発行

\*

著 者 アーサー・ミラー

訳 者 倉 橋 健

発行者 早 川 清

\*

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

\*

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(252) 3111(大代表)

振替 東京・6-47799

定価 2000円

ISBN4-15-203340-1 C0098

# 北京のセールスマン

日本語版翻訳権独占  
早川書房

© 1987 Hayakawa Publishing, Inc.

## ことのおこり

人間の四人にひとりとは中国人である。とすれば、たとえば〈世界の偉大な〉作家や俳優や画家について語るとき、それが中国人にまったく知られていないのは、困った事態である。また中国文化の巨匠もほぼ同様に中国のそとでは知られていないから、この偉大な民族の孤立たるや、彼我の偏狭さと相俟って、信じ難いものがある。

文化革命の間十年以上にわたり、あらゆる海外の作品や影響に対してとられた隔離政策の結果、中国の演劇人はわずかにチェーホフやゴーリキイ、トルストイ、イブセンおよびその中国の追隨者の形式を知るだけで、しかもそれは単に一九五〇年代初頭の中ソの蜜月関係のしからしむるところであった。一九六〇年代の、毛沢東の妻で元女優優江青の恐怖の統治下では、八つの〈模範劇〉（「紅燈記」「沙家浜」「智取威虎山」「海港」「白虎團」「奇襲」「紅色娘子軍」「白毛女」「交響楽」「沙家浜」）の上演だけが許されたが、これらは人間の存在をリアルに描いた芸術的作品というよりは、政治的デモンストレーションであった。

一九七八年に中国を訪れたとき、私は北京人民芸術劇院の主席曹禺と、演出家で俳優の英若誠に逢った。二人ともアメリカで過した経験があり、第二次世界大戦後のヨーロッパやアメリカ

カの商品の中国への紹介に熱心であった。だが、これは言うは易く行うは難しである。二人にしても、かくも長き完全な孤立のあと、はたして中国の観客が西欧の劇をどれほど理解できるか、自信はなかった。それにまた俳優の問題があった。中国の俳優は、へたをするとメロドラマになりかねない、ひどく誇張した非写実的な様式で訓練されており、欧米のリアリステイックな劇作のなから発展し、きわめて異なる文化的伝統から生れた、西欧の抑えた演技とは対照的である。

英若誠は学者の家系の出で、外国文学を広く読んでおり、また曹禺は一九三〇年代にアメリカで一年ほど過し、ユージン・オニールの作品に惚れこんだ。

彼は一九四九年の解放に先立つ数年間、社会の病める精神の破局を描いた、ユージン・オニールを思わせるいくつかの注目すべき戯曲を発表した。その中のあるものは、今また中国では非常に人気がある。曹も英も文化革命のもとでは手ひどい迫害をうけたが、一九七八年のいわゆる四人組の追放とともに、西欧との新たな接触に熱意を示した。しかしながら彼らの究極の目的は、新しい中国の現代劇と演技様式の樹立をめざして、西欧の劇作を研究することであった。

一九七八年に一旅行者としてやって来たとき、私は無心で事情にうかつたため、会っている作家や演出家や俳優たちの言わんとすることが初めはよく呑みこめなかったが、そのうちにはつきりしてきた——彼らはほとんど例外なく長期の獄中生活や追放から解かれたばかりで、なかにはその十年間に妻や友人を失った者もいた。そのとき七十歳だった曹禺は、かつて北京

人民芸術劇院の主席の地位から同劇院の本拠である首都劇場の門番におとされ、英若誠は農村で米を作って数年間を過したのであった。私が会った他の芸術家とおなじく、二人にしても、私やオニール以後のほかのアメリカの劇作家については何も知らず、またゴースキイ以後のヨーロッパの作家についても似たようなものだった。

その後二年を経ずして二人は一緒にアメリカに来了。英若誠はいくつかの映画の役のほかに、アメリカのテレビ「マルコ・ポーロ」でフビライ・ハン（忽必烈汗）を演じた。孤立している間に知り得なかった作品についての一つの見解が二人のあいだでまとまった。一九七九年には「みんな我が子」を上演しようといっていたのが、一年半たらずで気持が変り「セールスマンの死」になったのは、興味深い。この短い期間に彼らは、中国の開放政策にともない、観客がこのまったく斬新な様式をもつ「セールスマン」にも充分ついていけるだろうと考えたのである。それに一九八〇年代の初めには、数こそ少いが、「みんな我が子」と同じような古典的リアリズムの手法をもって書かれた新しい中国の劇がすでに上演されており、これでは新しい形式の指針にはならないと考えたのだろう。

そこで大きな問題として残ったのは、外部からの助けなしに「セールスマン」がやれるかどうかである。そしてついに、中国に来て「セールスマンの死」を演出してくれないかという申し入れになったのである。これには私も初めはびっくりした——言葉も通じないのに、どうして演出がでしよう？ それに三十年以上も商業文明から隔絶されてきた中国で、どうやって中国人の記憶にない生活の現実感<sup>リアリティ</sup>を舞台に作りだすことができるだろう？ なかなか決心がつか

なかった。

数カ月がすぎたころ、挑戦してみようかという気持がわいてきた。一つには、外国の演出家でこれまで中国人の俳優を使って中国で新しい劇をやろうとした者がいないことである。私が相談した中国通は否定的で、「セールスマン」は典型的なアメリカ劇だというのである。とはいえ、この作品は他のどの文化圏でも、理解されるのに問題はなかった。おりしも「るつぼ」が上海で上演され、観客の多くが文化革命中の自分の苦しい体験に照らして涙を流したというニュースが伝わってきた。それでも、私は自分に言いきかせた、「セールスマン」のリアリティには——とそのときは思っていた——越えがたい文化的制約があると。ウィリー・ローマンは、仕事に野心をもやし、成功熱にとりつかれた社会の所産である。中国は九十パーセント以上が農民で、現在の中国人の大半は、ウィリーが求めたのとは正反対のプロレタリア的社会主義的価値観を教えられてきている。いかに努力したところで惨憺たる結果に終るのではないか。最終的にやってみようかという気になったのは、コロンビア大学の財政的には独立した組織であるアメリカ中国芸術交流協会会長、周文中教授が、大丈夫だといってくれたからである。中国生れだがアメリカ籍になって長い周は、ウィリーは中国人に絶対にわかると力説した。英若誠と曹禺の希望に加うるに周の熱心なすすめもあって、この仕事がやり甲斐のあるものに見えるてきた。

この本は、一九八三年の春、朝九時から十二時までと、夜七時から十時までの稽古の合間に毎日午後書きつけた日誌をもとにしている。私は、自分の当初の無知を露呈するような記述も、

二カ月の活気にみちた困難な作業のなかで経験した誤解や判断の誤りも、そして新しい目  
中  
国  
を  
見  
る  
よ  
う  
に  
な  
っ  
た  
体  
験  
も、  
す  
べ  
て  
率  
直  
に  
残  
し  
た。



私の演出による中国における「セールス  
マンの死」の公演は、中国戯劇家協会と、ア  
メリカ側ではアメリカ中国芸術交流協会  
の尽力で実現した。両者に深く感謝する。

アーサー・ミラー



三月二十一日

初めてキャストにあらう。昨夜おそく着いたので英若誠は、今日の稽古は午前中だけということにしてくれた。実はひどい時差ぼけと、あけはなしたホテルの窓から入ってくる汚れた空気のためまったく眠れず、ぐったりだ。ブラハとおなじく、北京では軟炭もたき、炭で料理する。だから空気は煤がかすみ、靴はいつもよごれている。おまけにゴビ砂漠からの砂嵐。気管支炎がはやるのも無理はない。この国の貧しさをうっかり忘れていた。町とおなじく、着る物もねずみ色一色だ。この国の経済改革が焦眉の急であることがわかりはじめた。たりない物だらけだ。ほかの国では日常品がこんなに不足していないことを知れば、国民はいつそうそれを痛感するだろう。

俳優たちはアメリカの顔寄せと同様、特に緊張した様子はない。だが、彼らの気持を忖度することはやはり難しい。抑えた表情から判断するしかない。私は啞のようにその目の色に感情を読みとろうとしたが、とうとう読めなかった。今これを書きながらも時差ぼけがとれず、二十四時間の飛行機の旅のあとで前頭葉の働きがぶくなっている。きつと魂の一部を雲の上におき忘れてきたのだろう。とにかく私は、いささかいかめしい会議室の長テーブルの一端から、両側の肘掛椅子に坐った人た

ちに話しかけた。名前は一人もおぼえていない。昨夜空港でみんなと握手をかわしたのだが、それも何週間も前の遠いことのような気がする。リンダ役の女優は特に印象的だ。愁いをふくんだ美しい知的な大きな茶色の目は、悲しみもユーモアも解することを語っている。私の通訳の沈夫人——二十歳代後半の若い女性だが、大きな赤いベレー帽をふくめて一九四〇年代の年配の奥様然とした恰好をしている——の言葉にまっ先に笑ったり、うなずいたりするのは彼女である。

いまは朝の四時四十五分——ここまでの旅でどうかなってしまった神経と心配のため眠れぬままに、これを書きつづけている。こんな麻薬でも飲んだような状態になるのは、初めての経験だ。

この部屋は小さすぎるが、いずれ変えてくれるそうだ。少くとも私たちは、世界中どこへ行ってもおなじような、圧迫感をあたえる、濾過された空気ですたたきにのどが渇く、大きなホテルにいるのではない。ここの空気は汚れているが、空気には違いない。

昨日の顔寄せのとき、数人のスタッフと共に、舞台装置家、照明家、その助手たちも同席した。十人あまりが私の話を書きとめようとノートとペンを取り出すのを見て、気が重くなった。何も言うことはないのだから。おそらく、ハロルド・クラーマン（アメリカの演出家、一九〇一—八〇。スタニスラフスキー・システムにより俳優を教育した）がよくやったように、この劇について深遠な思想を語ることが期待したのだろう。だが、私は間違ったヒントをあたえて、あとで彼らを迷わせることを怖れた。

私は——彼らが「外国の大家」を前にしてかしまっているのを見てとったので——まず口を開かせようと、この劇のなかに中国の生活や習慣や信念と何か関係づけられるものがあるだろうか、とた

ずねた。もし共通するものがあれば、そこから始めたかったからである。

みんな黙りこくったままであった。演出家とは、何を考え何をしろと教えてくれる存在で、まさか質問が出るなどと思ひもよらなかつたのだらうか。私の目論見は徒勞に終つた。みんなは困つたような顔をしていた。やがて翻訳者でウィリーを演じる英若誠が口をきり、みんな数日間本読みをしただけで、考えがまとまっていけないのだと説明した。つまるところ、作品がわからなかつたのだなと思つた。

まあ、好奇心にかられて地球の反対側にきたからには、のんびりと成行きを見るとするか。この氣まずさを破るように、英若誠が、向うの稽古場に仮設舞台ができていると告げた。私はこれ幸いと会議室を出て、みんなと一緒に見に行った。それは実に大きな舞台で、防音のために茶色のパネルの壁をめぐらし、天井は少くとも四十フィートの高さである。舞台に面して肘掛椅子が一行に長く並び、オーケストラ・ピットは板でおおわれているが、なかには割れてささくれだつたものもある。稽古用のセットは、有り合せの張り物や、鋏でとめたキャンバスや木材で作られていて、初演のブロードウェイの装置をつくりだが、ウィリー夫妻の寢室は下手ではなく上手にあり、その他同様である。これは大した違いではないけれど、それにしてもなぜ装置家が、英若誠の通訳によれば、左右を逆にすることで「セットが観客に近くなる」と考えたのか、わからない。疲れ切っていたので、その理由を追及するのはやめた。この装置家も、キャストやスタッフの男女の面々とおなじく、紺色のデニムのような詰襟の標準服を着、だぶだぶのズボンをはき、人民帽をかぶっている。事ごとくにこの劇場と中国の貧しさを感ずる。がっかりするのはよそう。おそらく彼らの演技は、満ちたりた俳優たちより

も、しっかりしているだろう。

廊下は電力不足のため殆ど電気がついておらず、薄暗かった。それに、ドアをとじた会議室や稽古室以外は、トイレの臭いがただよっている。廊下も部屋も黄ばんでおり、何年も塗りがえした形跡がない。

とはいえ、この稽古用のセットは、私を元気づけてくれた。特に、モロスコ劇場の手狭な舞台に合せて作られた初演の装置よりも数フィート、幅も奥行も広いのがいい。まるで一九三〇年代の失業者用の掘立て小屋そっくりで、いろんな色あせたボロを壁にぶらさげ、古びた台や、ほかの芝居から転用した階段類がおかれていた。

下手の壁際に大きなボール箱があるのに気がついた。これは電気冷蔵庫のかわりだと装置家が——英若誠の通訳でいった。小道具係が椅子二脚とマホガニーのテーブルを持ちだしてきた。かつては然るべき装置と共に使われたものらしく、椅子は優雅な曲線をもっており、とてもアメリカの台所にあるような代物ではなかったが、今はそれをいうのを控えた——装置家やその誇り高き助手、それに私の反応はいかにと見守っている俳優たちをはやばやと失望させることもないと思ったから。あるいはこれが彼らにはアメリカの台所に見えるのかもしれない、とすると、このままでいいのかもしれない。ここで私は、はたとまだ解決できずにいる難しい問題にぶつかった。この芝居をどここの出来事にすればいいのだろう。中国か？ アメリカか？ どこだろう？ これが決められるまでは、家具についてのダメは出さないでおこう。

一方、台所に冷蔵庫とテーブル、椅子二脚しかないことに私は満足した。ニューヨークで英若誠に